

“おかしい“という感覚を手放さない！

～知らなかったことにはできないのだから～

リードオルガン奏者／分身ロボット「公認 OriHime パイロット」／

障害平等研修（DET）ファシリテーター／（療養介護棟）長期入院患者

松 原 葉 子

どうしても！と。今回はオンタイムでの Zoom 参加で一緒にさせていただきました。

と言いますのも、（先生とお呼びしそうになるのですが）俊さまの”旬”な”生”のお言葉に、いち早く触れたかったからです。

4 年ほど前でしょうか。NHK-E テレ「こころの時代」をたまたま視聴した折、俊さまと ACT-K の地域でのお働きに激しく心を動かされました。患者さんのところへみんなで出向いていく。ありのままの姿を捉えたドキュメンタリーそのものから受け取ったものの大きさはもちろんのこと、ある一つの言葉に深く共感と慰めを得たことを覚えています。

本来、人を動かす「力」は英語で”force”であるはずだけれども、病院の中では同じ「力」でも”violence”のほう、一方的に振るう力になってしまいがちだという意味でのくんだりだったと思います。

コロナ禍にあって、当時も入院中であった私は、「あたりまえの感覚」からどんどん病院の中の空気がかけ離れていくような危うさに抗うべく、必死でもがいている直中にあったから、問題の核心を再確認させていただき、まさに助け舟のような番組視聴となったので

した。

このたびのご講義でも、リスク社会とは、リスクが多い社会という意味ではないこと。リスクをなくそうとして色んなものを使い、作り、それが結局のところ、その制度や科学がリスクとなってしまう社会なんだと。腑に落ちました。

わたくし自身、人工呼吸器ユーザーで長期入院中の身ですが、今まさに、病院の事務と「リスク」「管理」を巡ってある種のたたかいの渦中にあります。感染症対策という大義名分をかけた、患者の権利、かけがえのない人生の機会を平気で奪う立場にあるという自覚がないところに、この社会全体の大きな人権意識の欠如を感じ、暗澹たる気持ちにさせられます。

けれども、俊さまご自身が「因縁の子」とおっしゃり、「降りかかってくる問題を見過ぎにできないんだよね」と述懐されておられましたように、わたくしも、ちっともありがたい困難ではありますが、自分に与えられたミッションとして、希望は失望に終わることがないと信じて、みんなのために頑張っていきたいと改めて思われました。(気持ちが萎えてしまいそうなほど悄気るときもありますが…)。

本質的に何が大切なのか。今回も、幅広い視点でそのことを客観的に見つめ直すことができました。そうした機会に触れるたび、新たな一步を踏み出す力をいただきます。

離れてはおりましても、何か同志とさせていただいているような喜びがあります。

貴重なご講義をこころからありがとうございました！またどこかで、近いうちにご一緒させていただきたいと願っております。